

式・ブライアン・ウィリアムズの姫路城

しろはく古地図と城の博物館富原文庫 代表 富原 道晴

姫路城は白亜の楼閣、白鷺城として、多くの画題に取り上げられた。城と言えば姫路城、誰もが訪れる日本の城郭建築の極致、その姫路城天守群の平成大修理が終わり、再び、姿を現した輝くばかりの白に姫路の人々は感動を新たにしている。黒田官兵衛の舞台となり、秀吉の中国攻略の拠点となった姫路城、国宝として、世界遺産として人々を魅了してやまない。



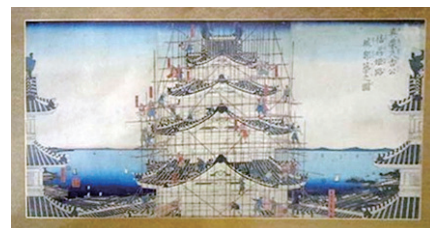
ブライアン・ウィリアムズの姫路城

姫路城が感動を与えたのは何も姫路人や城郭愛好家、さらに日本人だけではない。ここにブライアン・ウィリアムズという近江在住の画家がいる。1950年ペルー生まれのアメリカ人。1972年来日し、自称、「光、空気、静寂を描く現場絵描き」として日本各地を訪ね、日本の心の原風景を描いている。ここで取り上げるのはブライアンの姫路城である。1988年とあるから、38歳の作品である。100分の13とあり、版画としての印刷枚数は浮世絵の初摺りの半分である。あまり見る機会のない作品と言えよう。大きさは、73×73cmのシックな黒縁額に63cmの円形切抜きがあり、約61cmの木版画が収められている。版画の縁が和紙漉きの縁となっていることから、この版画のために円形和紙を特漉きしたものと思われる。最初に円形版画というフォルムに驚かされる。絵柄は冬景色で、姫路城天守東面を遠景に、帯の櫓下の高石垣を圧倒されるスケールで表現、さらに、その前に遠近法で木立を3本、版画全体を分割するように配置している。色は地色の雪の白、城郭のグレー、木立の黒と見事なコントラストで、円形の縁で締められている。まるで広重である。姫路城の情景は殆ど正面である南から描かれる。あえて、東の高石垣とのコントラストに聳える天守を配置したところに、黒と



姫路城二曲半双屏風部分

白という冬景色のコントラストに、円形版画という造形と真四角の黒縁額縁のコントラストに、美の極致を感じざるを得ない。本品を含めて、海外の方の日本の繊細な美意識には驚かされる。



錦絵五雲亭貞秀姫路築城図

同じ版画でも、これは錦絵である。姫路城錦絵の最高傑作である。画家は五雲亭貞秀、かの有名な空飛ぶ絵師である。幕末に多くの横浜絵を残している。極印に「戊辰八改」とあり、文久2年戊辰（1862年）の作と知れる。ちなみに殆どの錦絵は大正8年（1919年）の石井研堂による『錦絵改め印の考証』によって、その発行年月を知ることができる。大判3枚続きの36×72cmの中央に5層の大天守、画面の左右端に3層の小天守が描かれ、見事な3連天守の調和がなされている。大天守建築図として、建築丸太の骨組みが描かれ、遠景に瀬戸内海と四国が見える。天守には最上階に真柴久吉（羽柴秀吉）、以下、麻野長正（浅野長政）、佐藤正清（加藤清正）、浮島正則（福島正則）、畑切且元（片桐且元）等9名の武将が匿名で描かれているが、バレバレである。『真柴久吉公播州姫路城郭築之図』とされるが、1862年という幕府統制の時代を感じる。ここまではリアルな姫路城であるが、実は秀吉時代の姫路城は天正8年（1580年）から、わずか3年で、3層天守であったことが発掘調査で明らかとなった。この錦絵は現在の姫路城に秀吉神話をからめたものである。しかし、さすが、貞秀、姫路城天守群をワイドな画面に描ききっている。歴史錦絵中の名作である。同じように城郭を描く巨大な画面には『岡山城内博覧会図』があり、城郭錦絵の双璧を成している。

最後に現代姫路で作成されている、皮工芸『国宝姫路城』と題する作品、富原文庫玄関の二曲半双姫路城屏風を紹介して今回は終わりたい。



現代皮工芸姫路城